

コンチエルト
(協奏曲)

作・内藤三千郎

広島県尾道市出身の井上さつき(19)は、気鋭のフルーティストである。音楽の師である古橋多恵子(83)に師事し、『第1回全日本フルート・コンチェルト・コンペティション』のファイナリスト五人の中の一人に選抜されるが、実は地元で理容室を営む父、井上六三郎(50)の「笛など吹いても飯は食えん」という強い反対に遭い、理容師としての道を歩む傍ら、フルート奏者として身を立てることを半ば諦めていたのである。

一方、東京では同じく輝かしい受賞歴を持つ音大生・小森梓(22)が本選へと進み、プロのフルート奏者・真行寺舞(38)の指導のもと、日々、練習に励んでいた。梓の家は裕福であり、父親の小森健一(55)、母親の小森咲恵(49)ともに全面的に梓の音楽活動を支援しているが、父親の不倫、そして梓の弟である小森裕司(20)と父親の間の不和が家族に暗い影を落としていた。

それぞれの家族との葛藤、そして思いを胸に、井上さつきと小森梓は本選でぶつかり合う宿命を負うこととなるが、本選で本命視されているのは著名プロ奏者の桜河内莉子(27)であり、次点としてオーケストラ奏者の大木達夫(29)、そしてダークホースとして高校生で天才少女との前評判を持つ藤倉七海(16)であった。

ヒートアップするコンペティション。下馬評に反して、中盤で優勢となったのは楽譜を見ずに演奏をした藤倉七海であったが、それに触発されてさつきと梓も暗譜で本選に臨む。フルーティストの意地と未来を賭けた両者とも一步も譲らない演奏。コンチェルト(協奏曲)の名に恥じないオーケストラとの融合に聴衆は感嘆し酔いしれるが、それはさつきと梓それぞれの「家族」との「協奏曲」でもあった。

【登場人物表】

広島県尾道

- 井上さつき (19) 気鋭のフルート奏者
井上六三郎 (50) さつきの父
井上美子 (48) さつきの母
井上大樹 (17) さつきの弟
井上紗栄子 (15) さつきの妹
古橋多恵子 (83) さつきのフルートの師
大出香織 (33) 尾道新聞の記者
田頭文彦 (28) 尾道新聞のカメラマン

東京

- 小森梓 (22) 音大に通うフルート奏者
小森健一 (55) 梓の父
小森咲恵 (49) 梓の母
小森裕司 (20) 梓の弟
真行寺舞 (38) 梓のフルートの師
藤倉七海 (16) 高校生の天才フルート奏者
坂口浩 (38) 七海のフルートの師
桜河内莉子 (27) プロの著名フルート奏者
大木達夫 (29) プロのフルート奏者
唐木田重盛 (46) 刑事
久米敏雄 (48) オーケストラ指揮者

○広島県尾道・尾道水道を臨む埠頭（早朝）

広島県尾道市を本州と向島に分けて東西に延びる尾道水道に沿って、腰の高さほどのコンクリートの防潮堤に守られた遊歩道が長く続く。海岸通りと呼ばれ、尾道の観光名所であるが、早朝であるため、人影は栈橋から釣り糸を垂れる二、三人を除いて皆無である。尾道水道を隔てた向島の造船所から巨大龍の首のようなクレーンが何本もニヨキニヨキと頭をもたげているが、こちらも凍ったように動きを止めている。

どこからか聞こえてくる繊細な木管楽器の音。栈橋を臨む遊歩道に一人の女の影。

カメラが近づくと瘦身の若い女性がすつくと譜面台の前に立ち、銀色のフルートを演奏している。

井上さつき（19）である。

黒髪を後ろに纏め、ジーンズにTシャツ、足にはスニーカーといったラフないでたち。日に焼けて化粧の薄い顔は、眼光鋭く譜面に向けられている。

傍にはさつきのロードバイク。すぐ横のベンチの上にはバックパックとフルート・ケースが無造作に置いてある。

さつき、一旦、フルートを吹く手を止め、譜面台の上のスマホを操作する。

オーケストラによる『メンデルスゾーン・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン』の伴奏がスマホから流れ出す。

さつき、即座にフルートを唇に当て演奏を

始める。

ある程度、演奏が進んだ時にスマホのアラームがけたたましく鳴り始める。

さつき、演奏を止め、スマホを手にとって画面に表示された時刻を見る。

不満そうに舌打ちすると、急いでフルートを仕舞い、荷物をまとめ始めるさつき。

(主題曲と共にメインキャストとメインスタッフのクレジットとタイトルが流れ始まる)。ヘルメットを被り、ロードバイクに跨ってフェリーの船着場へ出るさつき。背にはバックパックとフルートの入ったフルート・ケース。

○フェリー

降船客を待つて、バイクごとフェリーに乗り込むさつき。5分とかからない短い船旅。海風がさつきのほつれた前髪を揺らす。

○向島

フェリーを降りて、ロードバイクで向島市街へと出るさつき。

片手でスマホを操り、スクリーンを片目に音声を聞きながら走るさつき。

住宅街からさびれた商店街を抜け、大通りへと出るさつき。

大通りを走る、さつきの自由かつ颯爽とした姿が美しい。

さつき、通り沿いのコンビニの前で自転車を止め、正面のドアかから中に姿を消す。

(クレジット及び挿入曲終り)

○ロンビニ・中(朝)

ドアを開けてバックパックとフルート・ケースを背にしたさつきが急ぎ足で入ってくる。

さつき「明るく会釈しながら」お早うございますー」

店長が振り向き、笑顔で軽くお辞儀する。

○東京・小森梓の家・表(朝)

大きく要塞のようなモダンな建築である。エントランス脇の表札に「小森」とある。

○同・グランドピアノのある部屋(朝)

ピアノの伴奏と共に、黄金色のフルートを奏でる小森梓(22)。

白いワンピースを着て、長い黒髪が印象的な美女である。大人しい顔立ちであるが、目の奥に芯の強さと気品を秘めている。

部屋の陳列棚には多くのトロフィーと表彰状。いずれも小森梓の受賞歴を物語るものである。

陳列棚の脇の壁に「第1回全日本フルート・コンチェルト・コンペティション」のポスターが貼ってある。

ピアノを弾いているのは梓のレッスンに携わる教師の真行寺舞(38)。色白で聡明そうな顔立ちには、品と落ち着きがある。

部屋の中にもう一人の人影。

梓の母親である小森咲恵(49)が部屋の片

隅の椅子に座して娘の練習風景をじっと見据えている。髪を後ろにまとめ美形であるが、どこことなく冷たい雰囲気がある。

舞「(ピアノ伴奏を止め、はつきりと) そのところもう一度やって」

梓「フルートをいったん口から離し、キツと舞を見つめて」はい」

ピアノ伴奏が再開され、梓がフルートを吹き始める。

演奏から曲目が『チャイコフスキー・バイオリン協奏曲第3楽章』のフルート・バージョンであることがわかる。

舞「(伴奏を続けながら強く) そこを強く！」

梓のフルートの音量が上がる。

舞「繊細に！」

梓の吹奏が静かに細やかになる。

舞「クレッシェンド！」

梓、一気に音調を上げ、クライマックスへと導いていく。

○尾道・古橋多恵子の家・表(夕方)

大きな日本家屋。門構があり、門柱の外にさつきのロードバイクが停めてある。

門柱の表札に「古橋」とある。

○同・ピアノのある洋間

柱時計の文字盤は五時半を指し、窓から差し込む弱い日差しが、夕暮れであることを物語っている。

十畳ほどのスペースにスタンドアップピアノ

ノがあり、さつきのフルート教師・古橋多恵子（83）が座している。白髪の老婦人であるが、目の光が情熱的で若々しい。

他に部屋には、古めかしい本棚とソファ、小さなデスクと椅子。

ソファの横の壁にこれ見よがしに貼られている「第1回全日本フルート・コンチェルト・コンペティション」のポスター。

楽譜スタンドの前にフルートを手に立つさつき。緊張の面持ちである。

多恵子「やさしく）さつきちゃん、こないだのところ、ちゃんとお家で練習して来た？」

さつき「（自信なさげに）はい」

多恵子「（微笑みながら）時間があまり取れなかったんでしょう？」

さつき「（素直に）すみません」

多恵子「お家の中で練習できないことはわかってるわ。埠頭で練習してるのよね」

さつき「はー」

多恵子「でも、あなたにはお勤めもあるんだし、それじゃ、仕上げに間に合わないかもね」

さつき「（顔を顰めて）がんばります」

多恵子「（ニコニコしながら）打倒、小森梓」

さつき「（恥ずかしそうに微笑んで）はい」

多恵子、壁の『第1回全日本フルート・コンチェルト・コンペティション』のポスターに視線を移す。

多恵子「少し考えてから）どうさつきちゃん、しばらく私のところに住んでみない？」

さつき「（驚いた顔で）え、ここにですか？」

多恵子「そう。炊事洗濯は自分でやってもらうけど、ここなら気兼ねなく練習できるし、通ってくることもないし、あなたもそのほうがいいんじゃない?」

さつき、うつむいて考える。

多恵子「お母さんには私から話しておくから」

さつき「顔を上げて」お母さんが問題じゃないんです」

多恵子「ちよっと間を置いて」お父さん?」

さつき、表情を曇らせて答えない。

多恵子「察したように」そうなのね」

さつき、再びうつむいてしまう。

多恵子「それなら、私がお父さんに話してもいいわ」

さつき「はっと顔を上げて」いいえ、大丈夫です。私から話します」

多恵子「(微笑んで) わかったわ。それじゃ、また始めるわよ」

さつき「は」

多恵子のピアノ伴奏と共に、さつきの演奏が始まる。曲は『メンデルスゾーン・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン』である。

小森梓に勝るとも劣らない演奏が、美しく部屋中を満たして行く。

○尾道・フェリー(夜)

向島から本州へと帰るフェリーの船上。

夜風に吹かれるさつきの物憂げな表情。

彼方に尾道市街の夜景。

○尾道・井上さつきの家・さつきの部屋(夜)

ぼんやりとスマホのスクリーンを眺めているさつき。

母・美子の声「階下から」さっちゃん、お父ちゃん帰ったよ」

さつき「(ハッと顔を上げて)はい、今行く」

さつき、意を決したかのように立ち上がり、部屋から出ていく。

○同・リビング・ダイニング(夜)

部屋の様子から、裕福な家庭ではないことがわかる。

さつきの父、井上六三郎(50)がリビングのソファに座り、テレビを見ながらリモコンを操作している。

もう一方の手には缶ビール。機嫌は悪くなく、そうである。

さつき、二階から降りてくる。

父親の様子を背後から盗み見るように眺め、キッチンに立つ、母・美子(48)に視線を送るさつき。

美子、目で小さく頷く。

さつき「お父ちゃん」

六三郎「振り向かずに」なんじゃ?」

さつき「ちょっと話があるんじゃないけど」

六三郎「(テレビのリモコンをいじりながら)

おう、言うてみ」

さつき「(テレビの画面に目をやり、少し躊躇

してから) 大事な話じゃけん」

六三郎、テレビを消し、何かとさつきのほうを振り向く。

さつき「(真剣な面持ちで) 実はな、フルートの練習のことなんじゃけど、多恵子先生が先生のところに住み込みで練習したほうがええって」

六三郎の表情が陰しくなる。

心配そうな美子。

さつき「それでな、お父ちゃんささええんじやつたら、そうしたい思うとるんじゃ」

六三郎、美子のほうを一瞥して、不機嫌そうに黙ってしまふ。

階段を駆け降りてくる音がして、さつきの弟であり井上家の長男である大樹(17)が姿を現す。

大樹「(美子に) お母ちゃん、ごはんまだ？」

美子、大樹に目配せして軽く首を横に振る。

大樹、事態を察し、黙ってダイニングの椅子に座ってしまふ。

しばし重い沈黙が流れる。

六三郎「(おもむろに) コンペはいつじやった？」

さつき「十一月三日じゃけど」

六三郎「(重く静かに) それまで学校は行かん

つもりか？」

さつき「(一瞬戸惑って、強く) それは前にも言うたじやろ。学校はコンペが終わったたら行くって」

六三郎「学校、続けるの来年になるな」

さつき「お父ちゃん、それでええって言うたじやろっ？」

六三郎「(厳しく) 家のことせんでええって言うた覚えはない」

美子「(さつきに目で頷きながら) 家のことは大丈夫じゃけん」

六三郎「(美子に) お前には聞いとらん」

美子「じゃけん、家のことは私がええ言うたら、ええん違います? 紗栄子もおるし」

六三郎「お前は、店があるじゃろうが。紗栄子には受験勉強もあるし」

美子「家のことはなんとかなります」

六三郎「(さつきに) バイトもやめるんか?」

さつき「バイトは続けるけん。ちゃんと家にお金を入れるけん」

再度、重い沈黙が流れる。

さつき「(六三郎に) ほんじゃあ、バイト終わ

ったら一旦家に帰って、それから多恵子先生のとこ行けばええんね?」

六三郎「(厳しい顔で) なんじゃと?」

美子「そぎゃなことしたら、先生のとこに住み込む意味がなくならんね? 練習する時間もなくなるけん」

大樹「(さつきに) 姉ちゃん、多恵子先生のとこ

行くんか?」

さつき「うん、コンペ終わるまで、住み込みで練習したほうがええって言われて」

大樹「俺も前から気になってたんじゃ。それええアイデアじゃと思う」

六三郎「(強く) お前は黙っとれ」

大樹「家事は俺が手伝うよ」

六三郎「野球の練習があるじゃろが」

大樹「練習の帰りに、買い物くらいはできるわ」

美子「大樹、あんたは気にせんでえ。大丈夫よ」

玄関のドアの鍵が開く音がして、学校の制

服姿で次女・紗栄子（15）が帰宅する。

紗栄子「（明るく）ただいま」

美子「（笑顔で）お帰り」

紗栄子「恵とお茶しとって遅くなった」

ドタドタとリビングに乱入するが、ただな

らぬ雰囲気気圧される紗栄子。

紗栄子「（誰にともなく）何？どうしたん？」

六三郎「（紗栄子に強く）勉強もせんで、どこ

ほつつき歩いとったんじゃ？」

紗栄子の表情が曇る。

紗栄子「（泣きそうな顔で）何？なんでうちがそ

んなこと言われんの？」

さつき「（紗栄子に）紗栄ちゃんが悪いんと違

う。姉ちゃんのせいじゃけん」

紗栄子「どういうこと？」

六三郎「（険悪に）みんなの犠牲の上で、お前

の姉ちゃんが笛吹き続けるつちゆうことじゃ」

美子「（大声で）あんた！いい加減にして！」

さつき、険しい顔のまま踵を返して二階に

駆け上がる。

六三郎を射るような目で睨みつける美子。

六三郎、言いすぎたという表情で、テレビ

をつける。

気まずい雰囲気が流れるリビングルーム。

○梓の家・ダイニングルーム（夜）

天井から煌びやかなシャンデリアが下がる、

二十畳はあるような大きなダイニングルームである。

中央に長方形のダイニングテーブルが置かれ、外のテラスに続くガラス戸を背に梓の父親・小森健一（55）、反対側に咲恵、長方形の長い辺側には健一から見て左側に長男の裕司（20）、右側に梓が座り、食事をしている。

健一「静かな声で梓に）今日のレッスンはどうだった？」

梓「順調に進んでるって先生に言われました」

健一「そうか。でも、何事も油断は禁物だよ。

（裕司のほうをちらちらと見ながら）コツコツと毎日の努力を積み上げることが成果に繋がる」

裕司、黙々と食事を続ける。

梓「明るく）はい」

咲恵「梓に微笑みながら）あーちゃんは大丈夫

よ。頑張り屋さんだもん」

梓、恥ずかしそうに咲恵に微笑み返す。

咲恵「今日も正味六時間は練習したもんね」

梓「肩を叩きながら、笑顔で）肩凝った」

咲恵「明日は午後からだから、午前中にマッサ

ージの先生に来てもらおう」

梓、ニコニコしながら頷く。

そのまま黙々と食事を続ける四人。

健一「咲恵に）明日の夕飯は要らないよ」

咲恵「ディナーミーティングですか？」

健一「咲恵と目を合わせず）いや、出張だ」

咲恵「顔を曇らせて）どちらに？」

健一「福岡だよ」

咲恵「一晩ですか？」

健一「その予定だが、もしかすると二晩になるかもしれない」

裕司、食事を終え、すつと席を立つ。

裕司「(うつむいたまま) ご馳走さまでした」

脇目も振らず退室する裕司。

怒りを込めた目で裕司の姿が消えるまで追う健一。

健一「(視線を咲恵に移して) あいつ、毎日ずつと家にいるのか？」

咲恵「相変わらずですよ。帰って来ないこともあるし」

健一「誰と遊んでるのか把握してるのか？」

咲恵「いいえ。聞いても言わないから」

健一「犯罪に手を染めるようなことはしてないだろうな」

咲恵「あの子に限ってそんなことはないと思いますけど」

健一「二度、調べてもらったほうがいいな」

咲恵「調べるって、精神科ですか？」

健一「いや、興信所だ。おかしな交友関係がないかどうか。下手すると俺の仕事に影響するからな」

咲恵「そこまでする必要はあるでしょうか？」

健一「あるね」

咲恵「わかりました」

目を丸くして、健一と咲恵を見る様

咲恵、梓にバツが悪そうに微笑んで食事を続ける。

苦々しい顔の健一。

○さつきの家・さつきの部屋(夜)

さつき、机に向かつて座り、スマホにイヤホンをつけて音楽を聴いている。電灯の明かりに照らされて、目には涙が光る。

ドアにノックがあり、振り向くさつき。

再度、ドアのノックを聞き、イヤホンを耳から外す。

さつき「はい」

ドアが開き、美子が顔を出す。

美子「微笑みながら」ええ？

さつきが頷き、美子が入室する。

美子「ご飯、まだ食べんの？」

さつき「お腹空かんけえ」

美子「お父ちゃんな、ええってよ」

さつき「驚いた顔で」ええ？

美子「笑顔で」多恵子先生のこと、ええって」

さつき、戸惑ったように首を振る。

美子「どうしたん？嬉しくないん？」

さつき「お母ちゃん、うち多恵子先生に断ろう思っちゃった」

美子「断るって、なんで？」

さつき「(涙が溢れて)うちもう、フルートやめる言おう思っちゃった」

美子「何言ってるの、今更」

さつき「(泣きながら)だって、そうじゃろ？」

お父ちゃん、うちがフルート吹くからみんなが辛い思いせにやいけんて思っちゃるんじゃろ？」

美子「さつきの肩に両手を置いて」そんなことないよ。知つとんね？さつちゃんが賞取つて、一番喜んどつたのお父ちゃんね？」

さつき「あれは、うちがまだ子供だったからじゃ」

美子「今だって同じよ。お父ちゃん、身体悪くしてから、将来が不安なんよ。大樹は高校生やし、紗栄子はまだ中学生なんじゃから」

さつき「ほいじゃけえ、うちも学校通つて理容師になろうとしちよる。お父ちゃんの代わりには早うお店に出るつもりでおつたんじゃ。多恵子先生から誘われんかったら、学校続けとつたんじゃ」

美子「わかつとるよ。お父ちゃんじゃてわかつとるよ」

さつき「うち、このコンクール終わつたら、ほんまにフルートやめるけん」

美子「涙を溜めて」ごめんな。お母ちゃん、さつちゃんに好きなこと思いつきりやって欲しかった。東京の音楽学校にも行つて欲しかつたんよ」

さつき「そんなこと言わんで。うちもう、決心しとるけん。このコンクールで優勝して、うちの音楽人生は終わりつて。それからはお父ちゃんやお母ちゃんに負けんような理容師になるんじゃつて」

美子「強く頷きながら」うんうん、がんばつて。お母ちゃんも、お父ちゃんも、みんな応援しとるけん」

さつき「ありがとう、お母ちゃん。心配かけて

ごめんね」

泣きじゃくるさつきを、しっかりと抱きしめる美子。

さつき「(泣き笑いながら) お母ちゃん、うち、お腹減った」

笑いながらさつきの顔を見る美子の顔が涙で濡れている。

○梓の家・健一の書斎(夜)

小森健一が書斎のデスクの上のPCに向い、真剣な表情で何かしている。

健一のメガネに反映するPCのスクリーン。部屋のドアにノックがある。

健一「顔も上げずに」どうぞ」

ドアが開いて、咲恵が入室する。手にした盆には、湯呑み茶碗。

咲恵「お邪魔ですか？」

健一「顔を上げて、神経質そうに」いや、今ちょうど切りのいいところだ」

咲恵「(湯呑みをデスクの上に置いて) さつきのことなんですけど」

健一「さつきっ？」

咲恵「裕司のこと」

健一、回転椅子を回して咲恵のほうを向く。

咲恵「ああいうお話は、梓のいないところでして下さい」

健一、眉を擡める。

咲恵「梓は今が大事な時ですから」

健一「(不快感を露わに) そんな話をしに来たのか？」

咲恵「強い表情で」大事なことですから」

健一、咲恵の気迫に気圧されて腕組みをして黙ってしまふ。

咲恵「それから、もう少し梓のことも構ってあげて」

健一「呆れたように」また、その話か」

咲恵の健一を射るような視線。

健一「だから、今夜もレッスンのこと聞いてやったらうう？」

咲恵「あの子は敏感なんです。あなたの質問が社交辞令なことくらいお見通しです」

健一、平手でデスクを強く叩く。

ビクツとする咲恵。

健一「(大声で) いい加減にしてくれ。どこまで俺が譲歩すれば気が済むんだ？」

咲恵「譲歩って、自分の子供のことでしょう？」

健一「そんなことはわかってる。前にも話したろう？俺には大事な仕事があるんだ。そこらの安サラリーマンと一緒にするな」

咲恵「(冷たく) あなたの仕事のこととはわかってるわ。本当にお仕事だけが問題なら」

健一「(動揺を隠しきれず) どういうことだ？」

咲恵、何か言おうとして躊躇する。

咲恵「とにかく、一度、レッスンでも見に来てあげて」

健一「(不快そうに笑って) それでお前の気が済むなら」

咲恵「(強く) あの子のためです。それに、あなただって梓がコンペティションに勝ったら鼻が高いでしょう？自慢の娘になるんじゃない

いんですか?」

健一「今だって自慢の娘さ」

咲恵「(冷笑的に) ならいいですけど」

健一「裕司のことはいいね?」

咲恵「そのことですけど、興信所なんて頼む必要がありますか?」

健一「なぜ?」

咲恵「そんなところ頼んで、もし悪い交友関係とかが発覚したら、良からぬ噂の元にならないかなって」

健一「興信所だって商売だからな。守秘義務は守るだろう」

咲恵「信用できますか? リークしたら、それこそあなたのお仕事に影響するんじゃない?」

健一、首を傾げて考える。

健一「裕司のことは放つとけって言うのか?」

咲恵「もう一度、お話してみたら?」

健一「(吐き捨てるように) 無駄だ。あいつは俺が嫌いなんだよ。俺のことを敵か何かとしか見てない。俺の子育てが間違っていたと言われれば、その通りかもしれないが、あいつは失敗作だと思ってる」

咲恵「子供は作品じゃないわ。不完全なものです。あなたは、自慢できるような子供じゃないと愛せないんでしょう?」

健一「(凶星というよう目を逸らせて) バカ言うな」

冷たい沈黙が流れる。

パジャマ姿のさつきが、ベッドに横になり、上半身だけ起こして本を読んでいる。

部屋のドアにノックの音。

さつき「顔を上げて）はい？」

ドアを開けて、大樹がおずおずと入ってくる。

さつき「どうしたん？」

大樹「笑顔で）姉ちゃん、お父ちゃんから〇

K出たんじゃって？」

さつき「本を閉じて、笑顔で）うん」

大樹「そうか。えかったな」

さつき「さつきはありがとう」

大樹「照れて）なんも。それで引越しはいつ？」

さつき「（ニコニコして）引越して、なんもないんよー」

大樹「笑って）そうか、なんぞ手伝えるか思

うて」

さつき「なんもない。着るものとフルートだけじゃ」

大樹「姉ちゃん、フルート命じゃな」

さつき「今回で終わりじゃけん」

大樹「それでええんか？」

さつき、大樹の言葉の意味が測りかねず、首を傾げる。

さつき「ええって？」

大樹「少し躊躇って）姉ちゃん、俺な、大学行くのやめよう思うとるんじゃ」

さつき「驚いて）何？」

大樹「大学、行かずに理容学校行こう思うちよ

る」

さつき、漫然と大樹を見る。

大樹「誤解せんで欲しいんじゃけど、姉ちゃんのためじゃないけん」

さつき「あんた、何言ってるの？お父ちゃんやお母ちゃんに相談したん？そんなこと勝手に決めちゃいけんよ」

大樹「お父ちゃんは家を継ぐ人間がいれば、文句言わん思うし、お母ちゃんかて反対しない思う」

さつき「じゃけん・・・」

大樹「(さつきの言葉を遮って) じゃけん、姉ちゃん、今度の大会優勝したら、音楽学校に行ったらええけん。この家に理容師は三人いらんけん」

さつき「大樹・・・」

大樹「(笑顔で) ほんじゃ、おやすみ」

言い残して去る大樹の後ろ姿を、狐につままれたように見送るさつき。

○尾道・天寧寺・座禪堂(早朝)

さつきが、他の客に混じって座禪を組んでいる。僧侶が歩み寄り、背後からさつきの肩を警策で叩く。お辞儀をするさつき。

○同・バーバー井上・中(昼)

さつきの父母、井上六三郎と井上美子が経営する尾道市街の理髪店である。六三郎と美子が甲斐甲斐しく働いている。

○同・表

さつきがロードバイクでやって来る。へ

ルメットを被り、背中に大きなバックパックを背負って、フルート・ケースを首から袈裟

懸けに下げている。

○同・中

さつきが自転車を外に停めるのが、ガラス張りの大窓の向こうに見える。

さつき、重いバックパックを自転車の横に置き、

フルート・ケースだけを首から下げ店の中に入ってくる。

六三郎と美子がほぼ同時にさつきを見て、仕事の手を止める。

さつき「お父ちゃん、お母ちゃん」

美子「さっちゃん、行くの？」

さつき「うん」

六三郎、顔をしかめ、黙って仕事を再開する。

美子「がんばって」

さつき「うん、しばらくは家に帰れんけど」

さつき、六三郎にも声をかけようとするが、六三

郎の様子を見て踏み止まる。

さつき「ほんじゃ、また」

軽く頭を下げて、踵を返すさつき。

六三郎「(さつきのほうを見ずに) 身体、気いつけるよ」

さつき、振り返って六三郎を見る。

六三郎、黙々と仕事を続ける。

さつき、涙を溜めて六三郎に深々と頭を下げ、店から出て行く。

淡々と仕事を続ける六三郎。
美子の目には涙が光る。

○東京・鍼灸院(昼)

梓が診療所の椅子に座り、鍼を打たれている。
腕、肩を中心に打たれた無数の鍼が痛々しい。
少し離れた位置に座り、心配そうに梓を見
つめる咲恵。

○東京・六本木の路上(夜)

小森裕司が虚な目でふらふらと歩いている。
道路を挟んで向かい側の歩道で、タクシーを
止める男の姿。傍らには、モデル風の若い美
女。男は、小森健一である。
目を見張る裕司。
健一、裕司に気付かず、止まったタクシーに美
女を先に乗せて自らも乗り込む。
走り去るタクシーを無表情で見送る裕司。

○東京・梓の家・ダイニングルーム(夜)

梓、咲恵、裕司の三人がダイニング・テーブル
を囲んで夕食を摂っている。
玄関の扉が開く音。
健一の声「ただいま」
梓「明るく」お父さんだ」
咲恵、立ち上がって部屋を出て行く。
裕司、黙々と食事を続ける。

○同・ダイニングルーム

健一がお土産を手に笑顔で入ってくる。

背後にスーツケースを手に従う咲恵。

健一「(笑顔で) たいま

梓「お帰りなさい」

裕司、挨拶もせずに食事を続ける。

不快な表情で、それを見る健一。

健一「(梓に笑顔で) お土産だ」

立ち上がってお土産を受け取る梓。

梓「(笑顔で) ありがとう」

咲恵「(健一に) お風呂も沸いてますけど」

健一「(ダイニングチェアにとっかか腰を下ろし) ます、飯だな。腹が減ったよ」

咲恵、キッチンに向かう。

健一「(梓に) 練習はどうだ？」

梓、笑顔で腕を伸ばし、包帯を巻いた手首を見せる。

健一「どうしたんだそれ？」

咲恵「腱鞘炎なんですよ」

健一「腱鞘炎?じゃ練習は？」

梓「大丈夫。先生も温熱療法と湿布で治療しながら練習できるって」

健一「そうか、無理するなよ」

裕司、食事を終え、黙って立ち去ろうとする。

健一「(大声で) 裕司!」

裕司、びくっとして立ち止まる。

健一「なんだお前のその態度は?最近ちょっと度が過ぎるぞー!」

裕司「(振り向かずにボソボソと) すいませんでした」

立ち去ろうとする裕司。

健一「待てーまだ話が済んでない!」

キッチンの手を止め、強張った表情の咲恵。

目を大きく見開いて硬直不動の梓。

裕司、ゆっくり振り向いて反抗的な

目で健一を睨みつける。

健一「なんだ貴様 その目は？」

裕司、目を逸らす。

健一「親に向かってなんだと聞いている」

咲恵「あなた、もうやめてください！お食事中

なんだから」

健一、咲恵の言葉に一瞬たじろぐ。

裕司「(怒鳴って) 父さんこそなんだよ！」

健一、裕司を睨み返す。

裕司「出張とか言って、女と逢ってるだろ！」

俺が知らないと思ってるのか？」

驚愕と狼狽を隠せない健一。

裕司「綺麗事ばかり並べやがって！」

健一「なんだと貴様！」

咲恵「(叫んで) やめて！」

掴みかかろうとする健一を押し倒す裕司。

梓「(叫んで) やめてよ、二人とも！」

裕司、興奮の面持ちで、そのまま家から走り

出る。

信じられないといった表情の健一。

ショックに硬直した梓と咲恵。

○尾道・古橋多恵子の家・ピアノのある洋間(夜)

さつきが多恵子の伴奏で、レッスンに励ん

でいる。

多恵子「そのクレッシェンドのところ、もっと強く」

頷きながら、演奏を続けるさつき。

多恵子「もっとタンギングを早く」

頷いて、続けるさつき。

多恵子、ピアノの手を止めて、立ち上がり、自分のフルートを手に取って、さつきの隣に立つ。

多恵子「さつきのところはこうよ」

先刻さつきが吹いた部分を、見事に吹いて見せる多恵子。

多恵子「あなたのは、こうなっちゃてるの」

さつきの真似をして吹いて見せる多恵子。

多恵子「どう？ 違いがわかる？」

さつき「(真剣な表情で) はい」

多恵子「あなたは技術は確かなんだけど、表現が、この部分フラットになっちゃってる。

もっと感情を込めていいの。一番感情が盛り上がるころなんだから。音楽の優秀は、どれだけ人を感動させることができるか。それには、奏者が感情移入できるかどうかよ」

さつき「はい」

多恵子「(微笑んで) じゃ、もう一回やろうか？

それとも、ちょっと休む？」

さつき「大丈夫です。もう一回やります」

多恵子、ピアノに戻り伴奏を始める。

上半身を揺すり、演奏に集中するさつき。

○東京・梓の家・ダイニングルーム(夜)

健一と咲恵が、ダイニングテーブルを挟んで対座している。

重苦しい空気が澱んでいる。

咲恵「(暗く) それでどうするんですか?」

健一「なんのことだ?」

咲恵「お相手の人のことも、裕司のことも」

健一、目を逸らして苦々しい表情。

咲恵「放っておいていいの?」

健一「あいつはそのうち帰ってくるぞ」

咲恵「裕司のことじゃないわ」

健一、狼狽したように咲恵を見る。

咲恵「お相手の人のことは、薄々知ってました」

健一の表情が驚きのそれになる。

咲恵「お若い人なんでしょう? 将来とか考えて

あげなくていいの?」

健一、目を逸らして口をへの字に結ぶ。

咲恵「もし、私と離婚したいなら、梓のコンパが終わってからにして」

健一、目を上げて咲恵を凝視する。

冷たく無表情な咲恵。

健一「(とつとつと) 俺は、離婚なんて考えて
ない」

咲恵「(冷笑的に) お仕事に影響するものね」

健一「そうじゃない。俺はもともと家庭を壊す

つもりなんてない」

咲恵「もう壊れてるでしょう?」

健一「(心外といった顔で) 俺のせいだって言

うのか?」

咲恵「違いますか?」

健一「お前にだって非があるだろう。梓のフル

ートばかりにかまかけて、裕司のことを疎かにしてきたのはお前だろう」

咲恵「(反抗的に) 裕司はもう大学生ですから、

母親ができることなんてないわ」

健一「あいつが帰ってこなくても、知らんぷりしてる。交友関係も知らない。それじゃ、あんまりじゃないか？」

咲恵「私だって、できることはしました。でもお部屋にも入れてくれないのに、どうしろって言うの？携帯だって見せてくれないのよ」

健一「それなら携帯なんて解約しちまえ」

咲恵「あなたがしたらいいでしょう？あなたのお金なんだから」

健一、不満そうにキッチンカウンターの上のデジタル時計を見る。

時刻は、十一時半を過ぎている。

健一「携帯、繋がらないのか？」

咲恵「首を横に振って」GPSも切ってるの」

健一、難しい顔で考え込む。

○同・梓の部屋（朝）

梓がぼんやりと椅子に座っている。

ドアにノックがあるが、反応しない。

ドアが開いて、咲恵が首を出す。

咲恵「驚いて」あ、いるの？先生、待ってるわよ」

梓（無気力に）今日はお休みするって言って」

咲恵「（心配そうに）手が痛い？」

梓「ううん、やる気が出ないから」

咲恵、表情を豹変させ、梓のところにつかつかと歩み寄る。

咲恵「（強く）何言ってるの？そんなこと言ってる場合じゃないでしょう？」

無視する梓。

咲恵、梓の腕を捉えて、立ち上がらせようとする。力づくで、振り解く梓。

梓「(強く) やめてよ!」

咲恵「(たじろいで) どういうつもり?」

梓「(大声で) やりたくないの。そういう日も

あつていいでしょ?」

咲恵「(大声で) 舞、わざわざスケジュール調整して遠くから来てるのよ?」

梓「(大声で) お金払えばいいんでしょう?」

お金払って追い返して!」

梓の頬に、咲恵の平手打ちが飛ぶ。

頬を押さえ、立ち上がる梓。

打った咲恵も、自らの行動に驚いた表情。

梓、目に怒りと涙をためて一瞬、咲恵を睨

みつけ、そのまま部屋から走り出る。

後を追わず、自らの手を見て呆然と立ちつ

くす咲恵。

○梓の家の近くの児童公園(朝)

人気のない公園で、ぼんやりと一人でブランコに座っている梓。

梓を探しに出た咲恵が、娘を見つけて歩み

寄る。梓、ボンヤリと咲恵を見上げる。

咲恵「(不自然な笑顔で) 舞、帰ってもらった

わ」

梓、何も言わずにブランコを漕ぎ出す。

しばらくそれを見ているが、耐えきれずに

ブランコの鎖を掴んで制止する咲恵。

咲恵「(苦しそうに) さっきはごめんね」

梓、答えずに静かにブランコを揺する。

咲恵「私、どうかしてた」

梓「(キッと咲恵を睨んで) お母さんは平気なの?」

咲恵、一瞬たじろぐ。

梓「(強く) 昨夜のこと、平気なの?」

咲恵、言葉を探して狼狽える。

梓「私は平気じゃない」

咲恵「あれはあれ、これはこれでしょう?」

勝ちたいんでしょう、コンクール?」

梓、答えずにまたブランコを漕ぎ出す。

再び止める咲恵。

梓「(周囲を見回して) 昔は、ここにいるだけで幸せだったな」

困惑の表情で梓を見つめる咲恵。

梓「(漠然と) 私もう、コンペやめる」

咲恵「何言ってるの?」

梓「もうレッスンしたくない」

咲恵「(狼狽して) おかしなこと言いたくないで。今日はお休みでいいから。明日から、

またレッスンしましょう」

梓「何のために?」

咲恵「あなたのために決まってるでしょう?」

梓「そうなのかな。本当はお母さんやお父さんのためじゃない?」

言葉に詰まる咲恵。

梓「それならそれでもいいんだけどね」

梓、ブランコから立ち上がり、お尻の汚れを手で払う。

梓「先生には謝っというて」

家とは反対方向に歩き始める梓。

咲恵「どこに行くの?」

梓「振り向いて笑顔で」心配しないで。遅くなるかもしれないけど、危ないところに行ったりはしないから」

咲恵「歩き去る梓の背中に」レッスンは続けるのね?」

梓、答えずに歩き続ける。

遠くなる梓の後ろ姿を、放心したように見つめる咲恵。

○東京・レストラン・中(夜)

小森裕司がウェイターとして忙しく働いている。

入り口に姿を表す梓。接客係に声をかけられて頷きながら、裕司の姿を、目で追っている。

テーブルに案内されて、着席する梓。

メニューを開けて目を通していている間に、姉とは気付かない裕司が水とおしぼりを持って来る。顔を上げる梓。

裕司「(驚いて) 姉貴!」

梓、優しく笑う。

裕司「(見回して) ひとり?」

梓、笑顔で頷く。

裕司「どうして?」

梓「ここで働いていることは知ってたの」

裕司「父さんと母さんは?」

梓「言っただろ」

裕司「何しに来たの?」

梓「(真顔で) 話があるから」

裕司「それでわざわざ？」

梓「裕司、携帯切ってるじゃん」

裕司「俺、今、忙しいから」

梓「いいよ。何時に終わるの？」

裕司「九時」

梓「待ってるから」

裕司、水とおしぼりをテーブルに置き、

お辞儀をして立ち去る。

再び、手元のメニューに目を落とす梓。

○東京・バー・中

薄暗いバーのテーブル席に対面で座る梓

と裕司。テーブルの上に、カクテルが置

いてある。

梓「(店内を見回して) ここ、良く来るの？」

裕司「(笑顔で) 俺の給料じゃ無理っしょ。

前に何回かレストランのオーナーに連れて

きてもらったことがあるだけ」

梓「いつからあのレストランに？」

裕司「もう三ヶ月くらいになる」

梓「じゃ、お小遣いだいぶ溜まったでしょう

？」

裕司「(笑って) ウェイターは薄給だから」

つられて笑い、カクテルに口をつける梓。

裕司「話ってそんなことじゃないよね」

梓「(頷いて、おもむろに) 裕司のこと、私の

こと、お父さんのこと、お母さんのこと、

家族のこと」

裕司、暗い顔でカクテルを啜る。

梓「このまま帰らないつもり？」

裕司「さあ」

梓「(真剣な表情で) 家族って、みんなで守るものだと思うの。私も、裕司も、お父さんも、お母さんも力を合わせて」

裕司「(鼻で笑って) それ、父さんに言うべきじゃない？外で女作って遊んでる人だよ」

梓「お父さんとお母さんの問題でしょ？」

裕司、呆れたように梓を見る。

裕司「ずいぶんあの人の肩持つんだな」

梓「別に肩持ってるわけじゃない。私だって嫌だけど、干渉したくないだけ」

裕司「大人だね」

梓「全然。家族をバラバラにしたくないの」

裕司、グラスを上げて笑顔でバーテンダーにお替りの合図をする。

裕司「それで、俺にどうしろって言うの？」

梓「お父さんに謝れない？」

裕司「(不快な表情で) 姉貴、わかってないな」

梓、眉を寄せて裕司を見る。

梓「学校もずつと行ってないんでしょ？」

裕司「ああ、単位落とすと思う」

梓「それでいいの？」

裕司「(自虐的に笑って) 姉貴は俺のことなんかよりフルーツ吹いてればいいじゃん」

梓「私、そんなにメンタル強く見える？」

裕司「姉貴は強いよ。俺なんかよりずっと」

首を振って考え込む梓。

バーテンダーがお替わりのカクテルをテーブルに置いて行く。軽く礼をする裕司。

裕司「俺は姉貴のこと応援してるよ」

梓、意外といった顔で裕司を見る。

裕司「(照れ臭そうに)カッコいいと思うし、

尊敬してる」

梓「(笑って)じゃ、尊敬ついでに私の頼み

聞いて」

裕司、苦笑して首を横に振る。

梓「直接謝るのが嫌なら、私が謝つといてあ

げるから」

裕司「(梓を睨んで)余計なことほしないで」

梓、裕司に気圧されて黙ってしまふ。

裕司「(腕時計を見て)あ、もうこんな時間だ。

母さん、心配してるよ」

梓「大丈夫、遅くなるかもって言つといたから」

裕司「(立ち上がって)途中まで送ってくよ」

梓「今夜も帰ってこないの?」

裕司「(ニヤリと笑って)彼女のとこのほうが

楽しいから」

勘定をしに、レジに向かう裕司。

不満げに席を立つ梓。

○尾道・千光寺公園(昼)

人影まばらな公園。

譜面台を立て、フルート片手に演奏の準備

をするさつき。傍らにはバックパック

とフルート・ケース。

譜面を開き、スマホのボタンを押すとオ

ーケストラによる『メンデルスゾーン・

バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・

バージョン』の伴奏が始まる。

さつき、即座にフルートを唇に当て演奏を開始する。その音色の良さに、一人、また一人と周囲に人が集まってくる。

X X X

感心して演奏に聞き入る人々。演奏が終わると、万場の拍手。

さつき、笑顔でお辞儀する。

サインを求める子供たちに応じるさつき。

子供たちに混じって尾道新聞の新聞記者・

大出香織(33)の姿。

香織「(一歩前に出て)すみません。お話し伺っていいですか?」

さつき、怪訝な顔。

香織「尾道新聞で記者をやってる大出という者ですが」

香織、名刺を名刺入れから取り出し、さつきに手渡す。

軽くお辞儀をして、名刺に見入るさつき。

○梓の家・グランドピアノのある部屋(昼)

『チャイコフスキー・バイオリン協奏曲第3

楽章・フルート・バージョン』を舞のピアノ

伴奏で演奏している梓。

咲恵の姿はない。

舞「(伴奏の手を止めて)そこ音が違う!」

梓、フルートの吹奏を止める。

舞「(強く)違うでしょう!何回言ったらそここのところ間違わずに吹けるの?梓ちゃんらしくないわ。もう一ヶ月ちよつとしかないんだよ!」

舞、ピアノ伴奏を再開するが、梓はフルート

を吹こうとしない。

舞「どうしたの？ちよつと休む？」

梓、むっとした顔で答えない。

顔をしかめて梓をじっと見る舞。

舞「意を決したように」お母さんから聞いたわ

驚いた表情で舞を見つめ返す梓。

舞「（穏やかに）コンペ出るのやめたいんだって？」

梓、仕方なきように頷く。

舞「梓ちゃん、ここまで一生懸命やってきて、

それつてもつたいないと思わない？」

答えない梓。

舞「梓ちゃんが、誰にも負けないくらいにがんばってるのは私が一番良く知ってるわ。だから疲れることもあるでしょう。辛いこともあるでしょう。私は、ここまで来たら、少しペースダウンしてもいいって思ってるんだけど」

梓「（ボソリと）そういう問題じゃないんです」

察したように視線を落とし考え込む舞。

重苦しい沈黙が流れる。

舞「（思い直したように）梓ちゃん、こんなこ

と今更あなたに言うことじゃないかもしれないな

いけど。音楽の力って何だと思う？」

梓「音楽ですか？」

舞「そう」

梓「（暗い顔で）人を楽しませたり、感動させたりできること」

舞「そう。だけどね、その楽しみとか感動って、時には何物にも替え難いものなの。あなたは

まだ若いから実感がないかもしれないけど、人生って本当にいろんなことがあるのよ。苦しいことも悲しいことも、辛いことも山ほどあるの。そんな時に、ある音楽と出会ったことで勇気づけられたり、生きる力を与えられたりする人が沢山いるの」

梓、曖昧に頷く。

舞「そんな力をあなたは持つてるのよ。でもね、その力は誰もが持つてるわけじゃないの。なぜかって言うと、その力を手に入れるには、才能とものすごい時間と努力が必要だから」

梓、神秘的な面持ちで下を向いてしまう。

舞「良く聞いてね。今回のコンペをやめても、あなたの人生が終わるわけじゃないし、フルートだって続けることはできる。でも、あなたにとって一番辛い時にがんばることが、勝ち負け関係なく絶対将来の財産になるから。私はそう信じてる。だから、あと少し、私についてきてくれない？きつと良かったと思う時が来るから」

梓、舞の言葉を反芻するかのように何度も頷く。

舞「いい？大丈夫？」

梓、大きく頷いてフルートを唇に当てる。

再び、ピアノ伴奏に合わせて演奏を始める梓。

○同・ダイニングルーム(夜)

梓と咲恵がテーブルを囲んで食事をして
いる。

咲恵「(笑顔で) あーちゃん、今日は凄く良かったんだって?」

照れくさそうな笑顔で頷く梓。

咲恵「もうほとんど仕上がってるんじゃない?」

梓「改善の余地はあるけど」

咲恵「もちろん、気を緩めるには早いけど。あ

ーちゃんには楽しんで欲しいから」

梓、意外といった表情。

咲恵「どうしたの?」

梓「(微笑んで) ううん、お母さんから楽しんで

って言われたの初めてかも」

咲恵「(戸惑いを隠せず) え、そんなことないと

思うけど」

梓、明るく笑い、つられて咲恵も笑う。

携帯音が鳴り、咲恵がスマホを手にする。

見慣れぬ番号。

咲恵「誰かしら。もしもし?」

咲恵の顔が曇る。

咲恵「はい、そうですけど」

心配そうな梓の顔。

咲恵、梓に目で合図をし、ダイニングルー

ムを出す。

○同・健一の書斎(夜)

健一がデスクに座り、咲恵は立ったまま、健

一に対峙している。

健一はネクタイも解いておらず、今、帰宅し

たといった様子。

健一「吐き出すように(万引きとは、まったく

下らないことをしてくれたもんだな」

咲恵「(表情を変えずに)それで、どうしますか？」

健一「どうもこうも、迎えに行く他ないだろう。誰かが身元引き受け人にならなきゃ、前料がつくからな」

咲恵「(不安そうに)常習じゃないらしいけど」

健一、苦々しく舌打ちする。

咲恵「迎えに行くの?」

健一「(驚いたように)俺がか?」

咲恵、黙って頷く。

健一「冗談じゃない。お前が行ってくれ」

咲恵「私は行きません」

健一「なぜ?」

咲恵「あなたが行くべきだと思うから」

健一「(苛立ちを隠せず)だから、どうして俺なんだ?」

咲恵「(冷静に)あなたが父親だから」

健一、立ち上がってデスクの後ろを歩き始める。

咲恵「(強く)あの子には、あなたが必要なの。それがわからない?」

健一、振り向いて何か言いたげに咲恵を睨む。

咲恵「今を逃したら、もうチャンスはないわ。

あの子は体は大人でも、心はまだ子供なの。

どうしていいのかわからないのよ。この万引

き事件は、あの子からのSOSだと思う。手

遅れになる前に、歩み寄らないといけないの

は、大人のあなた」

健一、顔を歪めて目を逸らす。

咲恵「梓も心配してるから、行ってあげて」

健一「梓に言ったのか?」

咲恵「言わないわけにいかないわ。目の前で警察から電話があったんだから」

健一「苦々しく」バカだな、大事な時に」

咲恵「叫ぶように」一度でいいから、裕司のこと考えてあげて！お仕事のことじゃなく、梓のことでもなく、裕司のこと！」

見上げた健一の目に、動揺の色が走る。

○麻布警察署・表（夜）

正面にタクシーが止まり、料金を払ってスーツ姿の健一が降り立つ。

入り口に立つ警察官に何やら話すと、入館を許される健一。

○同・応接室

簡素なテーブルとソファ、肘掛け椅子が置かれた殺風景な部屋である。

健一が若い警察官に案内されて入室し、ソファに座ると、しばらくして、部屋のドアにノックがあり、婦人警官が茶を持って来る。

健一が茶に手を付ける前に、再びドアにノックがある。

健一「はい」

刑事の唐木田重盛（46）がお辞儀をして入室する。私服を着ているが、眼光鋭く、目で刑事とわかる風貌である。

唐木田「（ブスツとした表情で）どうも、刑事をやってます唐木田といいます」

健一「深々と頭を下げ」この度は、ご迷惑をおかけしました」

唐木田、健一の正面の椅子に座る。

唐木田「小森裕司君のお父さんで間違いないですね」

健一「はい、父親です」

健一と唐木田、名刺を交換する。

唐木田「健一の名刺を見ながら」ご立派なご職業だ」

しばし、ぎこちない沈黙が流れる。

唐木田「改まった感じで」息子さんのことなんですが、まだ学生さんだし、初犯のようなので、警察としても前科がつくようなことは避けたいんですよ」

健一「恐縮です」

唐木田「ただ、私のような若輩者が申し上げることじゃないかもしれませんが、お父さんを大変恐れていらつしゃるようで」

健一、表情を曇らせる。

唐木田「今回のことも、お父さんには絶対知らせないで欲しいと」

健一「渋い顔で」そうなんですか」

唐木田「苦笑して」お父さんの携帯番号はどう教えてもらえませんでした」

健一「申し訳ございません」

唐木田「いやいや、我々としては、ちゃんとした身元引受人さえ来ていただければ、それでいいことですから」

健一、眉間に皺を寄せて頷く。

唐木田「それじゃ、裕司君を呼びますがよろしいですか？」

健一「はい」

唐木田、立ち上がってドアを開ける。

唐木田「(部屋の外に向かつて) おい、彼、連れて来て」

唐木田が着席すると、しばらくしてドアにノックがあり、制服の警察官に連れられた裕司が入って来る。

健一と目が合い、すぐに目を逸らす裕司。

唐木田が立ち上がり、裕司と対面する。

唐木田「お父さんにはよく話しておいたから、今日はこれで帰りなさい」

暗い顔で、頷く裕司。

唐木田「(健一に) それじゃお父さん」

健一、立ち上がり、そのまま裕司をエスコートする形で、部屋を出る。

○同・表(夜)

健一と裕司が正面から出てくる。

夜空を見上げる健一。

健一「(裕司に) タクシー拾うけど、お前どうするの？」

裕司、戸惑ったように、恐れるように健一と目を合わす。

健一「行くところあるのか？」

裕司「(ボンボンと) あることはありますけど」

健一「そうか、そこへ行くか？」

裕司、気まずそうにうなだれている。

率先して、歩き始める健一。

裕司「(背後から) 父さん」

振り向いた健一に、裕司が深々と頭を下げる。

裕司「頭を下げたまま」すいませんでした」

健一、一瞬面食らったような顔をするが、気を取り直したように裕司のところへ戻り、肩を叩く。

健一「歪んだ笑顔で」もういい、済んだことは済んだことだ」

裕司、顔を上げて健一を見る。両者の間にぎこちなさはあるが、敵意はない。

裕司「悲痛な表情で」父さん、俺・・・」

健一、何も言うなどばかりに、大きく頷く。しばらく、お互いを測るような沈黙が流れる。

健一「腕時計を見て」どうだ、ちよつと飲んで帰るか？お前、飲めるんだらう？」

裕司、驚いたように健一を見るが、やがてその顔に、安堵と微笑みが訪れる。

裕司「小さく笑って」今日は、家に帰ります。

母さん、心配してるし」

健一「笑って」そうか、それもそうだな。怒られるな」

肩を並べ、晴々とした表情で歩を進める健一と裕司。

○尾道のカフェ・中(昼)

さつきと尾道新聞の記者・大出香織がテーブルを挟んで座っている。

テーブルの上にはオレンジジュースのコーヒー。

香織「そうなの、そんな大きなコンクールのために練習してるのね」

さつき「は？」

香織「予選は大阪で？」

さつき「はい。予選は課題曲だけだったんです
けど、本選は自分の好きなコンチェルトの最
終楽章で競うことになってます」

香織「メモ帳に何か書き込む。」

香織「あなたのことちょっと調べさせて貰った
の」

さつき、曖昧に頷く。

香織「素晴らしい受賞歴ね」

さつき、恥ずかしそうに首を横に振る。

香織「それもまだ十九歳」

さつき、小さく笑う。

香織「どうしてもっと世の中に知られてないの
かしら」

さつき「フルートは地味な楽器じゃけん。国際
大会とかもあるけど、ピアノとかバイオリン
みたいな有名な大会があるわけじゃないので」

香織「メモ帳にまた何か書き込む。」

香織「ね、あなたの特集みたいなもの、うち
の新聞で組みたいと思うんだけど、どうか
な？」

さつき「(笑って) 私は有名人でもないから」

香織「うちの新聞も令和元年創刊の新しい新
聞なの」

さつき「私の家でも購読してます」

香織「(嬉しそうに) そう、ありがとう。うち
の新聞も、井上さんと一緒に育っていきけるよ
うな気がする」

さつき「(恥ずかしそうに) 私、ほんまにそん
なんじゃないですから」

香織「(笑顔で) じゃ、特集で決まりね。練習

の邪魔になるような取材はしないし、ご家族の迷惑になるようなこともしないから安心して「手早く何かをメモしている香織を、面白そうに見るさつき。」

香織「今度、カメラマンと一緒に井上さんの写真を撮りにお伺いしたいんだけど。ご自宅でいい？」

さつき「え、あ、はい」

香織「それともご両親の理髪店のほうがいいかな？」

「ご両親と一緒にの写真も欲しいから」

さつき「両親に聞いてみます」

香織「お願いね」

さつき、曖昧にうなずいて目の前のオレンジジュースを啜る。

○コンペティションのチラシ

チラシには演奏順に五名のファイナリストの名が、演奏曲目とともに並んでいる。

大木達夫（モーツァルト・フルート協奏曲第1番第3楽章）

桜河内莉子（イベール・フルート協奏曲第3楽章）

藤倉七海（ベートーベン・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン）

小森梓（チャイコフスキー・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン）

井上さつき（メンデルスゾーン・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン）

○梓の家・グランドピアノのある部屋（昼）

梓 舞、咲恵が頭を突き合わせ、ピアノの上に広げた「第1回全日本フルト・コンチェルト・コンペティション」のチラシに見入っている。

舞「(咲恵に) 一番の強敵は大木さんと桜河内さんだと思うけど、梓ちゃんのほうが順番が後だから有利だと思います」

梓、ニコリとして頷く。

咲恵「(さつきの名前を指さして舞に) この井上さつきって、あのさつきちゃん?」

舞「はい、(梓に) 何回かコンクールで会ってるよね?」

梓、頷く。

咲恵「(舞に) どうなの? 順番取後だけ?」

舞「本命じゃないですけど、古橋多恵子先生なので、完成度の高い演奏になると思います」

咲恵「(藤倉七海の名を指さして) この子は?」

舞「坂口浩に師事してる一六歳の高校生です」

咲恵「演奏聴いたことあるの?」

舞「ないんです。でも、ジュニアでは敵なしって聞きました。予選も最高得点で通過してるの?」

咲恵「(梓に) 知ってる?」

梓「私のグループにはいなかったから」

舞「ベートーベンを選ぶとは思ってなかったですけど」

咲恵「難しいの?」

舞「難易度って意味じゃなくて、もともとフルートのために書かれた楽曲じゃないですから、審査員がどう見るかですね」

梓「それは、私も同じですよね」

舞「そうね。でも、梓ちゃんはチャレンジできるだけの成熟度があるけど、藤倉さんにそんな力があるとしたらちよつと驚きかも」

咲恵と梓、顔を見合わせる。

○尾道・バーバー井上・中(昼)

客のいない店内。

さつきを除いた井上一家が店内に集まっている。

六三郎と美子は理容師の白衣を纏い、手持ち無沙汰に立っているが、長男の大樹と次女の紗栄子は、いずれも学校の制服を着て客用の椅子に座り、スマホの画面に見入っている。

六三郎「壁の時計を見てイラつき気味に）遅いな」

美子、六三郎に微笑む。

六三郎「(大樹に) 大樹、お前、もういつぺん電話してみ」

大樹「(面倒そうに六三郎を見上げ) 大丈夫じゃけん。十分遅れる言うとったじゃろ」

六三郎「もう十分過ぎとるで」

美子「(面白そうに) あんた、ちよつと落ち着いて」

紗栄子「(笑いながら) お父ちゃん、新聞に載るの嬉しそうじゃ」

六三郎「(狼狽して) 何言うтонじゃ、お前」
表にバンが到着するのが見える。

大樹「来た」

バンからフルーツを手にしたさつき、香織、

そしてカメラを手にしたカメラマンの田頭
文彦（28）が降りて来る。

そわそわする六三郎。

椅子から降りる大樹と紗栄子。

さつき「（入口のドアを開けて）ごめん、遅く
なった〜」

香織と田頭がさつきの後に続く。

香織「（頭を下げて）お待たせしてしまつて、
申し訳ありません」

香織、六三郎に名刺を差し出す。

香織「この度はお忙しいところ、お時間を頂き
ましてありがとうございます」

六三郎「名刺を受け取り、緊張の面持ちで
いえいえ」

香織「（美子のほうを向いて）お母様ですね」

美子、微笑みながらお辞儀をする。

香織「（美子に名刺を手渡しながら）尾道新聞で
記者をやっております大出香織です。本日は
どうもありがとうございます」

美子「（笑顔で）こちらこそ」

両親の様子を、楽しそうに見ているさつき、
大樹、紗栄子。

香織「それじゃ、早速ですけど集合写真を撮ら
せて頂きますので、よろしく願います」

ざわざわと家族五人が集まり、中央にフルー
トを手に持ったさつき、両側に六三郎と美子、
その外側に大樹と紗栄子。

香織「（田頭のほうを振り向いて）じゃ、よろし
く」

田頭「（笑顔で）それじゃ、皆さん、思いっつきし

明るい笑顔でお願いします」

田頭、微笑んでいる家族の前にひざまつき、
何度かシャッターを押す。

○さつきの家族の集合写真

フルートを手にしたさつきを取り囲むように
笑顔で並ぶ、さつきの家族。

○新幹線・中(昼)

東京に向かって疾走する新幹線。

井上さつきと古橋多恵子が並んで座ってい
る。

別の座席には、記者の大出香織とカメラマ

ン・田頭文彦。

さつきは、イヤホンでスマホから流れる
音楽を聴きながら、車窓を流れる風景を
眺めている。

多恵子、読んでいる単行本から時々目を
上げ、さつきを見て優しく微笑む。

香織と田頭は何かしら談笑しているが、
新幹線の音にかき消されて聞こえない。

○めぐろパーシモンホール・場内

リハーサルのため、ステージ上にオー
ケストラ・メンバーが私服で揃っている。

ラフな服装の指揮者・久米敏雄(48)が
タクトを手にオーケストラと対峙している。

その横に同じくラフな服装の梓。手には、
金色のフルート。

客席には、舞の姿だけがポツリとある。

久米「(傍の梓に微笑んで) もう一度、頭から
でよろしいですか?」

梓、久米の目を見てしつかりと頷く。

『チャイコフスキー・バイオリン協奏曲

第3楽章・フルート・バードジョン』の冒頭の
力強いオーケストラ演奏が始まり、続いて梓
の静かなフルート吹奏が始る。

嬉しそうに微笑みながら、タクトを振る久米。

(WIPE)

○同・場内

井上さつきのリハーサルである。

小森梓の時と同様のいでたちでステージの上
に立つ久米敏雄とオーケストラ。

ジーンズにTシャツの格好で、ステージに立
つさつき。

客席には、古橋多恵子の姿。

さつきの楽曲『メンデルスゾーン・バイオリン
協奏曲第3楽章・フルート・バードジョン』

は既に終盤に差し掛かり、眼光鋭く、身を揺す
り、劇的なフィナーレを迎えるさつき。

演奏を終えたさつきに、笑顔で一礼する久米。
それに笑顔で応えるさつき。

オーケストラのメンバーも、パフォーマンスの
完成度の高さに満足した様子。

(WIPE)

○モンタージュ・めぐろパーシモンホール内にお
ける他の三名のコンペティション参加者・藤倉
七海(16)、大木達夫(29)、桜河内莉子

○都内のカフェ・中(昼)

いずれも、それぞれの楽曲のさわりのみ。学校の制服を着た七海は小柄な美少女であるが、にこりともせず、一徹な意志の強さがその顔に現出している。

大木達夫は音楽青年の風貌。小太りでオタクっぽいが、にこにこことフレンドリーな様相。桜河内莉子は、唯一、リハールからドレス姿。有名人らしいオーラがあり、微笑みにも貫禄がある。

○都内のカフェ・中(昼)

大出香織とカメラマンの田頭がテーブルを挟んで座っている。

テーブルの上には拡げられた『第1回全日本フルーツ・コンチェルト・コンペティション』のチラシ。

香織「(チラシに目を落としながら) 順当な線だと実績のある桜河内さんの優勝ってことになるんだけど、彼女、恋愛問題でゴタゴタしててスランプらしいの」

田頭「(呆れ顔で) そんなことまで調べたんですか?」

香織「(意味ありげに微笑んで) もちろん、記事にはしないわ」

田頭、納得したように頷く。

香織「(チラシの中の大木を指差して) 経験値が一番高いのが、写真撮ってもらったこの大木って人。コンペ参加者の中では最年長。オーケストラでフルーツ吹いてるプロだから、

硬いわね」

田頭「いい人でしたね。優勝は彼かな？」

香織「笑いながら手を振って」私は予測屋じ

ゃないし、音楽の専門家でもないから」

田頭「でも、さつきさんに勝って欲しいんです

よね？」

香織「うちの新聞としてはそうだけど」

田頭「チラシを見ながら」あとの二人は？」

香織「取材、断られたわ。でも下馬評では（小

森梓の名を指差して）この子が最有力ね。実

力では桜河内さんと変わらないらしいし」

田頭「強敵ばかりなんですね」

香織「（藤倉七海の名を指差して）ダークホー

スがこの子。坂口浩っていう気鋭のフルート

奏者に師事してる。まだ高校一年生だけど、

天才少女って噂」

田頭「天才少女って、さつきさんがそうなんじ

ゃ？」

香織「（微笑んで）そう、天才と天才のぶつ

り合い。とにかく、演奏中の撮影はスチー

ルも禁止。音源を録ることだけは許可もら

ったわ」

田頭「（カメラを手にして）それなら演奏前の

緊張感とか、写真に撮りたいですね」

香織「（首を横に振って）ううん、それもしな

いで。集中力を削ぐようなことはしたくな

いの」

田頭「僕の出番はもうなしですか？」

香織「ごめんなさいね。でも、演奏後の控室の

表情とかなら撮っても大丈夫だと思うわ」

苦笑いする田頭。

○梓の家・梓の部屋(夜)

デスクに向かい、身体でリズムを取りながら
イヤホンでスマホから音楽を聴いている梓。

ドアにノックがある。

梓「振り向いて」はい」

ドアが開いて、弟の裕司が顔を出す。

キョトンとした表情の梓。

裕司「(笑顔で) 今、大丈夫？」

梓「(笑顔でイヤホンを外し) うん」

裕司、そろそろと部屋に入る。

裕司「いよいよ明日だね」

梓「(微笑んで) うん」

裕司「(申し訳なさそうに) 俺、明日、学園祭
の役員やっててどうしても抜けられないんだ」

梓「え、そんなこと言いに来たの？」

裕司「(笑って) だって、姉貴には借りがある
からさ」

梓「借りって？」

裕司「俺が父さんと喧嘩した時、来てくれただ
ろ？」

梓「(笑顔で) なーんだ、そんなことか」

裕司「俺、あの時、言わなかったけど、すごく
感謝してるんだ」

梓、笑顔で頷く。

裕司「(親指を立てて) 明日は、万全？」

梓「(笑って) 音楽の世界に万全はないからね」

裕司「(笑って) さすが！」

梓、明るく笑う。

裕司「(右手を差出して) がんばって」
梓、裕司の手を握り、笑顔で何度も振る。

○都内のホテル・さつきの部屋(夜)

窓の外は暗い。
ベッドの上にあぐらをかき、黙々とフルートの手入れをしているさつき。

○めぐろパーシモンホール・表(昼)

『第1回全日本フルート・コンチェルト・コンペティション』の懸垂幕を横目に、続々と詰めかける老若男女の観客。

○同・場内

明るく照らし出された誰もいないステージ。
オーケストラの椅子と指揮者スタンドだけが、行儀良く並べられている。
客席が徐々に埋もれつつあり、ザワザワとした雰囲気。
ステージ正面から、少し離れた位置に六人掛けの審査員席があり、三人が既に着席し、談笑したり、目の前の書類に目を通したりしている。

○同・楽屋外の廊下

客席の喧騒が嘘のように静かな空間。
レディースタキシードに身を包んださつきが、ゆっくりと廊下を歩いている。
静寂を楽しみながら、集中力を高めているかのような表情。

○同・小森梓の楽屋

肩を大きく露出したAラインのドレスを身に纏った梓が、鏡の前に座り、メイクをしている。

その背後に、影のように立つ真行寺舞。

両者ともいつになく緊張の面持ちである。

ドアのノックにはっと顔を向ける舞。

舞「はい」

咲恵がドアを開けて入室する。

咲恵「歩み寄りながら）どう？」

舞「微笑んで）順調です」

咲恵「梓を見て）あーちゃん、素敵よ」

梓「（メイクを続けながら）ありがとう」

咲恵「（舞に）このドレスにして良かったわね」
舞 嬉しそうに頷く。

梓、メイクを終えて立ち上がり、笑顔で咲恵のほうに身を向ける。

宝石をちりばめたようなドレスのラインが流れるように美しい。

咲恵「綺麗ね。素晴らしわ」

輝くような笑顔の梓。

○同・場内

ほぼ満席となった観客席。

その中に、香織と田頭の姿。

六人全ての審査員が着席し、言葉を交わしたり、ステージに目を向けたりしている。

ステージ近くの客席には小森健一の姿。

しばらくして、咲恵が隣の席に着く。

ステージの上に現れたオーケストラを拍手

で迎える観客。

○同・ステージ

スタッフが奏者と曲目を客席に周知させるフリップをステージ脇に置いて帰る。

フリップには英語と日本語で大木達夫の名と、曲目が書かれている。

○同・ステージ袖

フルートと楽譜を手に、緊張の面持ちで待機する大木達夫。

少し離れて、指揮者の久米敏雄。久米が大木に歩み寄り、二言三言、話しかける。

笑顔で何度か頷く、大木。

ステージマネージャーの合図で、ステージへと出ていく久米。

○同・場内

久米の登場を拍手で迎える観客。

久米が登壇し、深々と頭を下げると、拍手が一段と大きくなる。

○同・ステージ

ステージに姿を見せた大木に拍手を

する観客。緊張しながらも、ニコニコ

と観客に挨拶し、久米やオーケストラ

の第一バイオリンistと握手する大木。

楽譜を譜面台に置き、第一バイオリン

ストと簡単な音合わせを済ますと、久米と相槌を取ると同時に『モーツァルト・フルート協奏曲第1番第3楽章』の演奏に入る。

固唾を飲んで演奏に聴き入る聴衆。

○同・女子化粧室

さつきが洗面台の前に立ち、手を洗っている。化粧室のドアが開いて、ドレスを着た梓が入ってくる。

一瞬、鏡の中で互いの目が合うが、梓は硬い表情のまま黙ってさつきの後ろを通り過ぎようとする。

さつき「(鏡越しに、ためらいがちに) 小森梓さん、ですよね」

梓、立ち止まって鏡の中のさつきを見る。

さつき「私・・・」

梓「さつきの言葉を遮って」知ってるわ。井上さつきちゃん、でしょ」

さつきの溢れんばかりの笑顔に、梓も釣られて微笑み返す。

さつき「振り返り軽く会釈して」よろしくお願ひします」

梓「こちらこそ。お互いがんばりましょう」差し出されたさつきの右手を握る梓。

梓「May the best of us win」

瞳の奥に闘志を燃やしながら、笑顔で握手を交わす二人。

○同・ステージ袖

ステージ上の大木の演奏が続く中、マネージャーに付き添われて自らの出番を待つ桜河内莉子。

手にフルートと楽譜を持っているが、表情は暗く、緊張し落ち着かない様子である。

○同・場内

大木の演奏が終わり、客席から大きな拍手が沸き上がる。

久米も笑顔と拍手で大木のパフォーマンスを讃える。

観客に大きく頭を下げる大木。

テーブルの上の紙に忙しく何かを書き込んでいる審査員たち。

久米と第一バイオリニストと握手をし、ステージから去る大木。

客席で言葉を交わしている小森健一と咲恵。

田頭に何か囁いている大出香織。

スタッフがステージ脇のフリップを桜河内莉子のそれに替える。

○同・小森梓の楽屋

楽譜を譜面台に置き、フルートを構えて頭の中で演奏を反芻している梓。その姿を温かく見守る舞。

○同・井上さつき楽屋

椅子に座り、じっと目を閉じているさつき。

○同・ステージ

莉子の演奏が佳境に入っている。

熱を帯びたタクトを振る久米。従うオーケストラ。

○同・客席

莉子の演奏に魅入られたかのように静かな聴衆。

○同・ステージ袖

莉子の演奏に熱心に聴き耳を立てている古橋多恵子。

その背後には、坂口浩に付き添われた藤倉七海。無表情のまま、手にフルートは持っているが、楽譜は持っていない。

○同・ステージ

莉子の演奏が終わり、客席からは盛大な拍手。笑顔でそれに応える莉子。

拍手で称える久米、そして第一バイオリニストと握手をし、今一度、深々と礼をしてステージから姿を消す莉子に止まない拍手。

○同・客席

審査員席の審査員からも笑顔が見える。

感嘆を隠せない健一と咲恵。

言葉を交わす香織と田頭。

香織「(感動を露わに)彼女のインタビューは絶対取りたいわね」

田頭「優勝は桜河内さんですかね」

香織「順当なところね。お見事って感じ。あとは準優勝が誰かってところかな」

田頭「あと二人ですね」

香織「深く頷いて」藤倉七海ちゃんの後には、休憩時間が入って、いよいよ小森梓と井上さつき
の直接対決」

○同・ステージ

オーケストラが譜面を新しいものへと替えている。スタッフがステージ脇のフリップを藤倉七海のそれに交換する。

○同・ステージ袖

相変わらずの無表情で学校の制服姿のまま
出番を待つ藤倉七海。

舞が姿を現し、多恵子を見て歩み寄る。

舞「(笑顔で)先生、お久しぶりです」

多恵子「(笑顔で)あら、お久しぶり」

舞「ご無沙汰しております」

多恵子「お互いさま」

ステージマネージャーに促されて、しっかりと足取りでステージへと踏み出す七海
手に譜面を持っていない。

はつと顔を見合わす多恵子と舞

客席からは拍手。

熱い視線で七海を見送る坂口。

○同・場内

藤倉七海を拍手で迎える聴衆。

初めて笑顔を見せ、久米そして第一バイオ

リニストと握手をする七海。

楽譜も譜面台も持っていない七海にざわつく聴衆。

田頭「(周囲を見回し) どういうことでしょうか？」

香織「譜面を見ないで演奏するのよ。プロでもなかなかしないことらしい」

田頭「どうしてそんなことを？」

香織「譜面がないほうが高得点なの。勝負に出たってこと」

得心して改めてステージの上の七海に好奇の視線を移す田頭。

○同・ステージ

七海が第一バイオリニストと音合わせを終え久米がタクトを振り上げると、『ベートーベン・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン』の伴奏が厳かに始まる。唇にフルートを当てる七海。

○同・小森梓の楽屋

譜面を片付けている梓。

いきなりドアが開き、舞が駆け込んで来る。

舞「(血相を変えて) 梓ちゃん、藤倉七海が譜面なしで演奏してる」

顔を上げ、意味がよくわからないといった表情の梓。

舞「暗譜してるのよ」

やっと思いを解し、表情を硬くする梓。

舞「譜面、持っていくでしようっ？」

梓「(不安そうに) 譜面なしで練習したこ
とないから」

舞「(何度か頷いて) うん、それでいいわ。

大事なのは演奏の内容だから。大木くんも

莉子さんも譜面ありで演奏してるし」

梓「さつきちゃんはどうするんですようか」

舞、不安げに首を傾げる。

○同・井上さつきの楽屋

瞑想を終え、演奏の準備をしているさつき。

ドアにノックがあり、顔を上げる。

さつき「どうぞ」

多恵子が硬い表情で入室する。

異変を感じて、怪訝な表情のさつき。

多恵子「さつきちゃん、あなた譜面なしで吹
ける?」

さつき「え?」

多恵子「藤倉さんが暗譜で演奏してるの」

驚いた表情のさつき。

多恵子「今のところほぼ完璧な演奏。このま

まだと譜面なしの藤倉さんが優勝ってこと
になるわ」

さつき、しばらく考える様子。

冷静に、それを見つめる多恵子。

さつき「(キッと顔を上げ) 吹けます」

微笑みながら、しっかりと頷く多恵子。

○同・ステージ

藤倉七海の演奏が、クライマックスを迎え
ている。テンションの上がる久米のタクト。

熱を帯びるオーケストラの演奏。

三者が一体となって、昇華して行く。

○同・客席

クラシックの楽曲とは思えないほど体でリズムを取り、乗りに乗る聴衆。

○同・場内

七海の演奏が終わり、聴衆からの割れんばかりの拍手で迎えられる。どこからとも上がる「ブラボー！」の歓声。

大きな笑顔で、それに応える七海。

久米も指揮者台を降り、笑顔で七海と握手をする。

感嘆の中に無言のまま顔を見合わず健一と

咲恵。同じく香織と田頭。

圧倒され、審査員席に沈み込む審査員たち。

七海が第一バイオリニストと握手をし、ステージを去るまで、拍手を惜しまない観客。

○同・小森梓の楽屋

梓、咲恵、舞が真剣な表情で向き合っている。

咲恵「あーちゃん、暗譜はしてるの？」

梓「(不安気に) 一応」

咲恵「(舞に) それなら譜面なしで」

舞「でも、出来るだけ完璧な演奏をするべきだと思います。それにはやっぱり楽譜があったほうがいい」

咲恵「(イラつきを見せて) 藤倉七海の演奏が完璧に近いのよ。桜河内さんの上を行ってるの。」

それも楽譜なしで」

舞「(梓に) どう? やれそう?」

咲恵と目を合わせる梓。

嘆願するような咲恵の目に、自分に言い聞かせるかのように何度か頷く梓。

梓「(舞にキッパリと) はい」

舞「わかったわ。じゃ、暗譜でやろう」

ドアにノック。

舞「はい」

ドアが開き、黒服のスタッフが顔を見せる。

スタッフ「お時間ですので、ご準備お願いいたします」

すつと顔を上げ、姿勢を正す梓。

並々ならぬ覚悟が、その表情に浮かぶ。

○同・場内

ステージに戻るオーケストラと同時に観客も客席へと帰ってくる。

健一の隣の席に戻る咲恵。

耳打ちされた健一、驚いて咲恵の顔を見る。

健一に微笑み返す咲恵。

着席している香織と田頭。

審査員も、全て着席している。

オーケストラが着席すると、久米が梓と共にステージに登場する。

同時に沸き起こる拍手。

ステージ脇のフリップは、既に小森梓のそれに替えられている。

客席に向かって、深く礼をする梓。

楽譜を携帯していない梓に、どよめく客席。

○同・ステージ

梓、第一バイオリニストと音合わせを終え、客席の咲恵と目を合わせ微笑むと、久米に目で合図する。

久米がタクトを振り上げ『チャイコフスキー・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン』の伴奏がオーケストラによって始まる。

おもむろにフルートを唇につけ、演奏を始める梓。

その音は繊細にして正確、そして力強く響き渡る。

○小森梓のモニタージュ（『チャイコフスキー・

バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・バージョン』と共に）

ステージで演奏を続ける梓。

自宅で真行寺舞とのレッスンに励む梓。

鍼灸院で鍼を打たれている梓。

自室で咲恵から平手打ちを受ける梓。

大学の学園祭で顔を輝かせている裕司。

○めぐろパーシモンホール・ステージ

梓の演奏が、クライマックスを迎えている。

汗をかきながらタクトを振る久米とヒート

アップするオーケストラの伴奏。

○同・客席

梓の演奏に乗って、体を揺すり恍惚とした

表情の聴衆。

○同・場内

梓の情熱的な演奏が終わる。

同時に「ブラボー！」の声が客席のあちこちから湧き上がる。

盛大な拍手で梓を称える聴衆。

数名が立ち上がり、スタンディング・オベーションで拍手をしている。

その中に、健一と咲恵。

両親と目を合わせ、客席に大きな笑顔で、頭を下げる梓。

久米も指揮者台を降り、拍手と握手で梓を称える。

第一バイオリニストと握手をし、再度、客席に深々と頭を下ると、自信に満ちた歩幅でステージを去る梓。

○同・ステージ袖

待機しているさつきとすれ違いざまに目を

合わせ、ニコリと微笑む梓。

さつき、大きく頷き微笑み返す。

○同・客席

興奮冷めやらぬ客席。

言葉を交わす審査員たち。

○同・ステージ袖

ステージマネージャーに促され、背後にいる多恵子に微笑みかけると、力強くステー

ジへと歩を進めるさつき。

同時に客席から聞こえてくる拍手。

○同・場内

さつきの登場に、惜しめない拍手を送る聴

衆。楽譜を持っていないさつきに、再び客席

はどよめき、審査員席がざわつく。

いよいよといった表情の香織と田頭。

○同・ステージ

指揮者の久米と笑顔で握手をし、第一バイ

オリニストとも握手を交わし、音合わせを

するさつき。

聴衆に深く頭を下げると、久米に目で合図し、

フルートを構えるさつき。

久米がタクトを振り上げ、『メンデルスゾー

ン・バイオリン協奏曲第3楽章・フルート・

バージョン』の伴奏が始まる。

ほぼ同時に、演奏を始めるさつき。

清廉かつ壮麗な音色が場内を魅了していく。

○井上さつきのモンタージュ（『メンデルスゾー

ン・ヴァイオリン協奏曲第3楽章・フルー

ト・バージョン』と共に）

多恵子の家でレッスンに励むさつき。

千光寺公園でフルートを吹くさつき。

店で散髪の仕事に精を出す六三郎と美子。

高校のグラウンドで白球を追う弟の大樹。

中学校の文化祭で笑顔の妹の紗栄子。

○めぐろパーシモンホール・場内

さつきの演奏が佳境に達し、見事なフィナーレを迎えると同時に客席の方々から沸き起る「ブラボー！」の声とスタンディング・オベーション。

圧倒されて、微動だにしない審査員たち。

小森健一、咲恵、大出香織、田頭文彦も客席に釘付けになったように動かない。

○同・ステージ袖

ステージのさつきの姿を見つめ、微笑みながら何度か頷く梓。

○同・ステージ

第一バイオリニストと久米と笑顔で硬い握手を交わし、今一度、客席に向かって溢れんばかりの笑顔で応えるさつき。
怒涛のように止まぬ拍手喝采。

○タイトル（黒に白抜きで）

『第1回全日本フルート・コンチェルト・コンペティション』審査結果

（優勝・僅差につき審査員の特別判断により同位とみなし二名）

井上さつき（広島県尾道市）

小森梓（東京都目黒区）

（準優勝）

藤倉七海（東京都港区）

（特別賞）

桜河内莉子（兵庫県神戸市）

(審査員賞)

大木達夫 (埼玉県所沢市)

エンド・クレジット (主題曲と共に)

(完)